

ハイドンと中山晋平

函館市医師会

みづせき
水関

きよし
清

午前中の外来が延びて、やっと遅い昼食にありついたある日の午後、スイッチを入れたエフエム放送から流れ出した曲は、「タン・タン！タ・タ・タン！」と軽快なリズムで始まった。その20秒後にもまた、「タン・タン！タ・タ・タン！」、さらに1分半後にも同様なメロディが流れたが、今度は「ショ・ショ！ショジョジ！」と聞こえる。その20秒後にも同じメロディが続いたが、確信をもって「證 證 證城寺」の文字が脳裏に浮かび上がった。このフレーズは、さらにその2分半後にも繰り返された後、楽章の切れ目の小休止に至った。

のちに判ったことだが、四楽章からなるこの曲は、ハイドン（1732-1809）が1787年に完成させた交響曲第89番へ長調・古くからの愛称は『W字』で、全体で20分弱の曲と知れた。私が惹き付けられたのは、6分余の第一楽章で、序奏を置かず、「證 證 證城寺」と聞こえる2小節の分散和音が、いきなり「フォルテ」でバイオリン演奏される。なお、第一楽章全体では、序盤に4度・終盤に1度の計5回、このフレーズが繰り返される。

言うまでもなく、「證 證 證城寺」で始まる童謡は、「證城寺の狸囃」である。児童雑誌『金の星』1924（大正13）年12月号に野口雨情（1882-1945）が発表した詞に、中山晋平（1887-1952）が曲をつけて、同誌の1925（大正14）年1月号に発表したと伝えられる。その際、晋平が雨情の詞の一部を改変したことについて、野口に連絡を取ろうとしたが、当時、旅行中だったため果たせず、『金の星』主宰・齋藤佐次郎の独断で掲載されたと伝えられる。

野口雨情・作の「證城寺の狸囃」の詞をみておく。「證城寺の庭は／月夜だ 月夜だ／友達来い 己等（おいら）の友達ア／どんどこどん。負けるな 負けるな／和尚さんに負けるな／友達来い。

（以下、略）」

一方、中山晋平の曲では、以下のように歌詞が部分的に改変され、出だしに同じ音を繰り返すことで、リズムカルで軽快な曲想になっている。

「證、證、證城寺／證城寺の庭は／ツ、ツ、月夜だ 皆（みんな）出て来い来い来い 己等（おいら）の友達ア／ぼんぼこぼんのぼん 負けるな 負けるな／和尚さんに負けるな 来い、来い、来い来い来い来い／皆出て、来い来い来い

（以下、略）」

そもそも狸囃子とは、『分福茶釜』『八百八狸物語』と並ぶ「日本三大狸伝説」の1つで、雨情は、千葉県木更津市の證誠寺に伝わる「狸囃子伝説」に想を得たものといわれる。以下に、伝説の概要を示す。

昔、「鈴森」と呼ばれていた證誠寺の辺りは昼なお暗く、夜には妖怪が現れると噂される所だったが、新しくやって来た和尚は、妖怪をみても全く驚かなかった。妖怪たちの正体は、森に住む狸だったが、親格の大狸は、この和尚さんの平然ぶりが癪にさわり、「ぜひと和尚を驚かせてやろう」として、ある企みを仕掛ける。秋の夜、何者かが大騒ぎすることに気づいた和尚が寺の庭を覗くと、大狸が腹を叩いてポンポコと調子を取り、それを囲むように何十匹もの狸が楽しそうに唄い踊っていた。お囃子のようなそれを見て、和尚も自慢の三味線を持って思わず庭に出て対抗し、まるで和尚と狸の音曲合戦のようになってしまった。それから毎晩、和尚と狸たちは唄い踊っていたが、4日目の晩、狸たちは現れなかった。和尚は翌朝、調子を取っていた大狸が庭で腹を破って死んでいたことに気づき、その亡骸をねんごろに弔った。

雨情が「證城寺の狸囃」を掲載した『金の星』の前身は、島崎藤村・有島生馬監修によって1919（大正8）年に創刊された『金の船』。前年の1918（大正7）年には鈴木三重吉によって『赤い鳥』が創刊され、翌年の1920（大正9）年には、西條八十が選者となって『童話』が創刊されるという、大正時代の童話文化が開花した時期にあたる。「こどもの幸せは大人の幸せ」を合言葉に、それまでの「わらべ唄」とは一線を画して、西洋のマザーグースに対抗できるような「童謡」を、北原白秋、西條八十、野口雨情ら、当時一流の作家が筆を執り、「言葉を駆使して絵を描く」ことを意図した。とくに白秋は、『赤い鳥』の1920年1月号に、「柱時計」（原題：Hickory Dickory Dock）と「緑のお家（うち）」（原題：There Was a Little Green House）を掲載したことを皮切りに、マザーグースの童謡を続けて同誌に発表し、ついに1921年（大正10年）末には、訳詩集『まざあ・ぐうす』として纏めたほどの力の入れようであった。

子供向けの文学的な作品・詩であることから、当初の「童謡」にメロディはついていなかったが、『赤い鳥』1918年11月号に掲載された西條八十の童謡詩『かなりや』に、作曲家の成田為三が旋律を付けた楽譜を載せたことが大きな反響を呼んで以降、童謡は音楽と密接に結びつくようになった。

「證城寺の狸囃」に戻ると、新しい童謡の創作に対する雨情の情熱に共感した晋平は、【ゆたかな個性と愛情が子どもの心を熱くつつむ】という考えのもとで、「子どもの心に帰れる歌とリズム」を目指した。確かに、雨情の詞を曲付きに改変する過程で、「證城寺」と「月夜」の前に、語頭の一文字を追加することで歌い出しのリズムを整え、文末の「来い」を繰り返すことで、歌い終わりの切れをよくしている。さらに、「どんどこどん」という太鼓本来の音色を、「ぼんぼこぼんのぼん」と、狸の腹鼓に擬した軽快なものにしたことで、「狸囃」という、表題を強く印象づけることにも成功している。

19世紀に長野県で生まれた中山晋平が編んだ童謡と、18世紀にオーストリアで生まれたハイドンが組み立てた交響曲。100年以上の時空の隔たりをものとしめない、驚くべき類似である。